

卓球たつきゅうは四人まで

「ねえ、今日、スポーツセンターに行かないか。卓球コーナーの予約よやくがとれたんだ。」
しゅんは、ひろし、さとし、あきらをさそった。

スポーツセンターの卓球コーナーは人気があつて、なかなか予約がとれない。しゅんは家の人になので、ようやく予約がとれた。

「昨日きのう、お父さんとうとスポーツセンターにならんで、ようやく予約がとれたんだ。」

四人が卓球の話題わだいでもり上がっていると、その話を聞いていたとおるが、

「ぼくも卓球をやりたいな。仲間なかまに入れてくれないか。」
と言ってきた。



とおるは、卓球クラブに入っている大の卓球ずきとして有名ゆうめいだった。

でも、とおるとはとくべつ仲がよかったわけではないので、しゅんは、始めはじめに声をかけた三人の顔を少しだけ見たあと、

「だめだめ。だってダブルスの試合しあいをやるから、四人でないとだめなんだ。時間は一時間半と決きまってるんだ。だから、四人まで。」

とことわった。

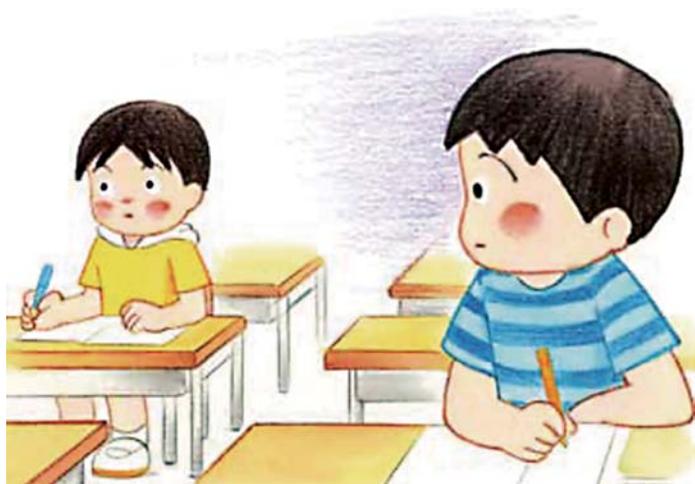
とおるは、何も言わず下を向むいたまま、しゅんからはなれていった。

授業中じゅぎょうちゆう、しゅんはさっきのことが気になって、ときどき、とおるの方を見ている。

昨日、しゅんのグループが給食当番きゅうじゆうばんのとき、当番でもないのに牛乳運ぎゅうにゅうはこびを手伝てつだってくれたのは、とおるだったからだ。

(とおるに悪いことをしちやっただかな……。)

その日の帰り、教室の出口で、しゅんはとおるにかけより、声をかけた。



「とおるくん、さっきはごめんね。今日、きみもスポーツセンターに来ていいよ。」
しかし、とおるは小さな声で、

「卓球は四人までなんだろ。」

と言って帰ってしまった。

しゅんは、何とも言えない気持ちになった。

その後、四人で卓球をしたが、しゅんはあまり楽しくなかった。

卓球の途中でしゅんは、

「今日、ぼくはとおるくんにひどいことを言っちゃった。どうしよう。」

とみんなに相談した。すると、みんなも気になっていたようで、

「ぼくたちも、気になっていたんだ。」

と言った。



四人はとおるにあやまろうということになった。そして、次の日曜日にとおるをさそって、しゅんの家で五人で遊ぼうということになった。

次の日、四人は、早めに登校し、校門でとおるが来るのをどきどきしながら待った。